

# 義太夫

義太夫協会々報  
第33号

昭和60年 1月10日 発行  
社団法人 義太夫協会発行  
〒104 東京都中央区銀座  
6-18-2 新橋演舞場B2  
TEL (541) 5471

## 次は団平と肥前掾か

義太夫協会会長 吉川 英史

私にとって、昭和五十九年は、竹本義太夫と旅行と腰痛の年であった。旅行と腰痛はさっておき、竹本義太夫は、義太夫協会にとって、少なくとも、年の後半は、竹本義太夫が最大の課題であった。

故人に対する感謝の催し、記念の事業は、義理人情を背景とする近松義太夫コンビによる芸を中核とする義太夫界の一手販売ではない。能の世界でも世阿弥の五百年記念を行ったし、箏曲界でも昨年八橋検校の三百年忌を行ったのである。

このような行事は、報恩感謝の意味を持つばかりではない。その事によって、関係者も自覚を強めたり、振興に努力したりする機会

とすることができる。また、漠然と演奏したり、鑑賞したりしているよりも「この人の作品だ。」「この人が生命を吹き込んだ曲だ。」と思うことによって、作品や演奏に対する感銘は一層深くなるに違いない。

ところが、私はこの点で申しわけないと思っているのは、近松半二の二百年忌を義太夫協会でしなかつたことである。それは昭和五十七年にすべきであった。何しろ、近松半二といえば、「伊賀越」「新版歌祭文」「廿四孝」「妹背山」「奥州安達原」その他、現行義太夫曲の名作の三分の一にも当たるかと思えるほどの作品を作った恩人である。文章家としては近松門左衛門に及ばぬだろうが、戯

曲家としては、大近松を凌ぐ才能も持っていた半二である。しかも、半二の作品はそのま現在演じられているのであるから、復原の手数も不要だし、改作のことなど断る必要もないわけである。半二の作品だけで芸術祭参加番組も作れたはずであった。惜しい。

このような失態を重ねないためにも、義太夫関係者の過去帳を作り、それを見て翌年が重要な年忌に当たっている人を調べ、毎年の祖先祭で公表してはいかかであろう。箏曲家故中島雅楽之都氏は、過去帳から一か月間のカレンダーを作られて、何日は誰と誰の命日であるということがわかるようになってい。それに、没年月が書き添えられている。ということは、毎日故人の霊を拜めるようになっていくわけである。

ところで、この次に記念すべき大物の候補者として、私は豊澤団平と豊竹肥前掾を考えている。  
(2頁下段へ)





# 頌 春

義太夫節保存会会長 豊 澤 仙 廣

明けましておめでとうございます。

義太夫協会が「義太夫節三百年記念公演」を無事に勤めさせて頂き、しかも賑々しく御来場下さいまして、皆様に厚く厚く御礼申し上げます。

続いて十二月二十日「心身障害児のための特別公演」に皆々様に御寄附を頂きNHKにも喜ばれて厚く御礼申し上げます。毎年の事ながら忠臣蔵通し公演は、お客様に喜ばれ、出演者一同一生懸命つとめさせて頂きました。

また前程から義太夫節三百年基金を皆様方にお願ひ申し上げておりますが、お寄せ下さるお一人お一人のお気持が本当に有難く感謝いたしております。今後共相変りませず義太夫節御後援の程、伏してお願ひ申し上げます。

良き年をお迎え下さいまして皆々様の御幸福をお祈り申し上げます。御挨拶とさせて頂きます。

昭和六十年初春

# 祖 先 祭 余 話

義太夫協会相談役 豊 澤 猿三郎

明けましてお目出度うございます。

十月の祖先祭の席上、私の仕たお噺が大層面白かったと、翌日中島古平様他二、三のお方からお電話を戴き、有難うございました。協会からも、新年号にあの面白い噺を書いて呉れとの事に書きましよう。

明治の後期、竹本八十太夫（後の三世越路

太夫様）が、師匠の二世越路太夫（後の撰津大塚様）に愛人との結婚のお許しをお願いに参りましたところ「芸妓さんでは子が出来ん、跡継ぎが生まれんよっていかん」と許可になりません。困りました八十太夫様は、堺に居

(1頁より)

豊澤団平は、「壺坂」や「良弁杉」の作曲者であるが、没年は明治三十一年であるから百回忌は、本年昭和六十年から十二年後に当たる。私は生きていたら満八十八歳になるわけだが……。

この団平の百回忌には、文楽ではやらない「日光山」も演奏してもらいたいと思う。芸術的価値は別として、明治の風俗を盛り込んだ英語入り義太夫は、宣伝価値が高い。今のうちに若手によく教え込んでもらいたい。

豊竹肥前様は、江戸に義太夫節を普及した功労者であるから、東京を本拠とする義太夫協会としては、ぜひ記念事業をやってもらいたい。しかし、肥前様の生誕は一七〇四年であり、死去は一七五八年であるから、生誕三百年は、二千四年に当たる。ということは、十九年先の話である。また、二百五十回忌は二千七十年に当たり、二十二年後ということになる。生誕三百年は、私が九十四歳の年、二百五十回忌は、九十七歳の年ということになる。いずれにせよ、私は関係がなさそうである。次期会長への申し送り事項としたい。それにしても、肥前様の記念演奏には、何を演ずるか、むずかしい企画になろう。江戸製の義太夫浄瑠璃として福内鬼外の作品でも選ぶか、江戸や関東を舞台にした作品を選ぶか、いろいろ考え方があるかと思う。豊竹肥前様の江戸進出にからむ新作浄瑠璃の委嘱初演という策もあるか。現在の若手に課せられた夢多き課題である。

る親友、小説家村上氏（後の文豪、村上浪六先生）に相談しましたところ、村上氏は「おしとこ実生活が苦しいのや。それに家内が妊娠や。生まれる子を貰うてんか」との事に八十太夫様は大喜び。そして早速、彼女の腹に布団を捲いてふくらませ、月を重ねるにしたがって布団を重ね、彼女も重たさに肩で息をする。人々は誠の妊娠と思ひ、お目出度うと喜んでくれました。やがて月満ち、村上家では男の子が生まれましたので、八十太夫様は早速貰いに行き、彼女も腹布団を取り、貰いたての赤ん坊を抱いて夫婦で師匠の宅へ挨拶に伺いました。師匠も大喜びで二人の結婚を許しました。

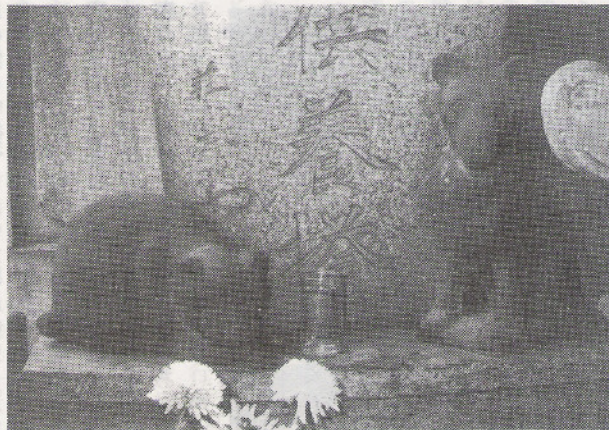
其の後、師匠は撰津大掾と成られ、八十太夫様は三代目越路太夫を襲名なさいました。赤ん坊も大きく成人、常子太夫と命名、文楽へも入りましたが、養父越路太夫様が亡くなられたので文楽を去り、地方廻りの芝居へ入りました。無論、常子太夫の名は許されませんでした。越路の隣の国の信濃太夫と自称仕ていられました。昭和二十三年、岡太夫君が播磨屋劇団に入座して、帝劇の「石切梶原」に出て居る折、楽屋を訪ねました時、三味線は元文楽の野澤吉作さんでした。其の部屋へ初老の男の人が訪ねて吉作さんに何か話して居ましたが、話が合わず淋し気に帰られました。後で聞きました常子太夫さんだったのでした。もう今は居られないでしょう。越路太夫様宅では御内室様の為か、越路太夫様のもて過ぎの為か、遂に実子は産まれませんでした。

一方、村上様のお話に成りますが、大正中期には俗に浪六流の文章が大流行仕て大文豪となり、「八軒長屋」を出版なさった時など、余り本が売れ紙の相場が上がって「洛陽の紙価を騰らしむ」という文章が生まれた程でした。私は若い頃から浪六先生を尊敬仕て、随分書物を集めました。回向院様へ犬猫供養塔を建てさせて戴きました時、題字をお願い致しましたところ快よくお書き下さいました。後日ご執筆料をお伺い致しましたら「若い者がよい事を仕たと感心してる。逆にごほうびを上げよう」とご寄進にあげりました。

又、ある人の御注意に、「犬猫ばかり供養仕て、三味線の糸になるお蚕は生き乍ら煮られちゃう、可愛そうな運命だ」とのお話に、ご尤もと、早速石屋の主人に、お蚕の繭形に糸塚と刻って飾っていただきたい、就ては石代・デザイン料・彫刻代を伺ったところ、意外外、実に意外、石屋さんが「おっしの名は糸塚三次郎でんだ。糸塚の三ちゃん毎日大勢の人におがまれりゃ嬉しいよ。金なんか要らねーよ」と、回向院様のお地代も無償、原画の大森画伯、題字の浪六先生も御寄進、糸塚の三ちゃん親方も奉仕。其の為、予算も大層余裕が出来ましたので、除幕式開眼の日には、呉服橋の京菓子の名店、菊麴舎さんで紅白の打菓子を一組造っていただき、ご参詣下さった因会わなみの数百人の会員様や、両国界限のお宅や子供衆にもお供養を差し上げ、本日に晴れ上ったよい天気の下でお祭りさせて戴きましたので、義太夫様のお墓の前で、犬

猫さんもお蚕さんもおほんとうに喜んでおりましょう。

以上、八十太夫様のお断は大正初期、浪六先生の友人、素義の和十様（堺出身）から伺ったお断をお伝え申しました。永いお話に成りまして、御退屈さまで――。



両国回向院の犬猫供養塔

諸宗山無縁寺回向院

東京都墨田区両国二一八一〇

(六三四) 七七七六

## 記念公演に思う

集団・日本の音主宰 杉 昌 郎

義太夫節三百年記念公演のご盛況は、協会員全体のご努力の成果と、心よりお慶び申上りたい。

義太夫節三百年の歴史を記念する、あの日の会場に身をおいて、つくづく思ったことが、遠く貞享の昔に創造された芸が、ともかくも今日まで伝えられ、しかも、現代の人々にも感銘を与える力を持ち続けていることは、まことにオドロキというほかはない。

そこで更に思うことは、能楽にしろ歌舞伎にしろ、およそ日本固有の芸能として、世界に誇り得るもの多くは、これすべて近代以前の産物であるとはどうしたことか。

つまり、産業経済の分野に於ては、いまや世界に冠たる日本ではあるが、固有の文化に限って言えば、近代以前の輝やかしい成果を越えているとは、どうも思えないのである。

ここで話はちょっと脇道にそれるが、ごく最近、ソウル大学から東大の大学院に留学している韓国青年と知りあう機会があり、なぜか彼と酒の市へ出かけ、その夜は、夜も白々と明けるまで語り明かしたわけだが、彼もまた、現代の韓国に於ける伝統文化の在り方を、大いに憂う一人であって、伝統をいかに正しく現代に対応させるかといった点について、

かなり突っ込んだ意見の交換を持った。要するに、かの地に於ても、若い世代のアメリカナイズからの伝統ばなれが、彼に云わせると、かなり深刻な問題であるらしい。

その意味から彼は、我々、集団・日本の音、あの七十年安保の時代から、すでに十七年にわたって続けている「巡回邦楽教室」に、ことのほか関心を示し、次の機会にはぜひ見学したいとのことである。

その折り彼にも云ったことだが、その民族にとつての、本当の意味での新しい文化とは、結局のところ、伝統に根差すところからしか生まれないのではないか、ということである。いかに時めいていようと、借り物文化を土壌に、それこそ義太夫節ではないが、三百年の命脈を保つ文化的所産が生まれるとは思えない。

どうもこの、我々日本人は、「伝統」というものを、とかく過去形でとらえがちだが、伝統の主体は、実は今日唯今いきている我々なのであって、例えば、あの日の土佐廣師の「重の井子別れの段」に接して、いたく感動し共感するところがあつたとすると、あの作品は、そしてあの芸は、決して過去のものではない。立派に現代の音楽なのである。

その意味で、作品の成立年代の古さや、芸の伝承の形態の古さが問題ではない、問題なのは、作品が、そして芸が、時代を超えて、本物であるか否かだけである。

近く機会をつくって、かの韓国青年を本牧亭へ誘おうと思つている。そこには多分、日本の誇る、数すくない本物の芸が、或いは、本物を目指す芸が、在ると思うからである。そしてこれも、文化の根を同じくする者同士、旧き佳き日を懐しむのではなく、いかにそれを、現代のものへと再創造を図るか、夜の白々と明けそめるまで、語りあかしたいと思つている。



FM東京制作「蜷川」於三越劇場(佐藤公夫氏撮影)

「白大根練馬の介み台所白妙の方」あれこれ

テイチクチャーディレクター 中 井 智慧子

昭和四十一年、「新版酒餅合戦」というタイトルの文化庁芸術祭音楽放送部門に参加した時のお話です。この作品の元は盲僧琵琶「酒餅合戦」と奥浄瑠璃「白黒餅合戦」を素材として、これを長唄・常磐津・義太夫の掛合形式にしてそれぞれの持味を充分に發揮した音楽性の高いものに仕上げようというのが狙いでした。

お話(内容)は酒が長唄、餅が常磐津、大根が義太夫という持ち分での世にも通じる上戸と下戸の心理を戦記もの形式に擬人化した素朴な庶民的芸能を三種の三味線音楽の対比の妙によってストーリーを展開させました。作曲は杵屋正邦氏。作の方はまだNHK馳け出し時代の私がライブラリーの棚に首を突っこんで資料をあちこち捜し出し、南の首僧、北の奥浄瑠璃と、抜粋し、当時NHKきつてのアイデアマンプロジェクトの名声高い上司の片山彦三氏に添削をお願いしました。

〆頃はいつよと たづぬれば  
きなこ元年 あづきの末  
餅の六郎あんころと  
酒の酔どれ三郎と  
座敷ケ原の大騒動

このイントロのめい文句にはじまる酒と餅の大合戦の真只中に  
「やあやあ静まれ 皆のもの  
武蔵の国の住人  
白大根練馬の介がみ台所  
白妙の方とはわらわがことなり……」と、

標題の白妙の方の出です。  
……酒の呑み過ぎ二日酔  
餅の喰い過ぎ胸やけも  
大根なくては叶うまじ  
あと味直すはわらわの役目

ここはわらわにおまかせ候え  
即ち義太夫が仲裁役です。その際だった語り口、重厚な太棹で座敷ケ原の大騒動がめでたく締められます。

義太夫は当時若手ナンバーワンの竹本朝重さん、三味線は鶴澤重造師。

酒の三郎、餅の六郎共々その気品の中に色香をたたえた見事な朝重さんの白妙の方にはただだ平伏するのみといった感情が自然と唄い上げられ本場に三者一体という見事な演奏でした。庶民のベースとユーモアをないまぜてコミカルに楽しい音楽として仕上り、民族芸能の精神がよく活かされた作品になった

と自負しております。お蔭様で優秀賞受賞となり再放送やら又舞踊化されて放映されました。現在までも各地の舞踊会で上演されております。

因に長唄は吉住小三八・稀音家六多郎、常磐津は須磨太夫・文字兵衛という第一線の錚々たる演奏陣でした。掛合の妙とゆうのでしようかいつの時代でも義太夫は生きています。独自の演奏でも、他種目の中でも、いつも決まります。殊に演奏のみの中で鍛えあげ受け継がられてきた女流義太夫。戦前、戦中、戦後と激動の世代をのりきり、その数(物量)の差こそあれ、否その演奏陣の充実さはいま、確実に花ひらき、着実に実をみのらせてゆきつつあることは本当にうれいし事です。

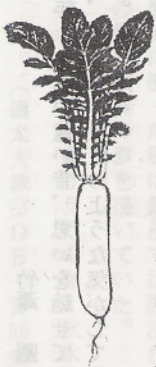
本年義太夫節誕生三〇〇年とか、これにさきがけてタイミングよく女流義太夫のレコードが出来ます。

女義を代表する方々の十八番の流行曲の演奏吹込みに立合い、そのすさまじいまでの気魄と熱気に私は強い感動を覚えました。胸が熱くなりました。

お蔭様でとてもいいレコードが出来上りました。デザイン陣も装幀に凝りました。

迫力があって、楽しくて、感動する。  
芸ってそうゆうものではないでしょうか。

(S 59・12・18 記)



# 義太夫節三百年記念公演 内容決る

十一月二十七日 三越劇場で

水上勉・作 蜷川 一 竹本義太夫物語——ほか

祖・竹本義太夫が、大阪道頓堀に竹本座の櫓をあげて丁度三百年、義太夫節三百年記念行事の掉尾を飾る記念公演の日が近づいて参りました。内容が決りましたので御案内いたします。お誘い合せお出かけ下さいますようお願いしております。

丹波与作待夜小室節より

「道中双六」 若手 掛合

お誘い合せお出かけ下さいますようお願いしております。

## 義太夫節三百年記念公演

\*日時 昭和五十九年十一月二十七日(火)  
午後六時開演・五時十五分開場

\*会場 日本橋三越劇場(二四一)三三一

\*入場料 当日 二、五〇〇円(全自由席)  
前売 二、二〇〇円( )  
前売開始 十月二十日(土)

お問合せ・お申込みは  
義太夫協会事務局  
電話(五四一)五四七二  
(月)金 十一時(四時)

スライドによる

義太夫節三百年の歴史 吉川 英史

水上勉・作 鶴澤重造・作曲

蜷川——竹本義太夫物語—— 朝重

近松門左衛門 竹本 越道

宇治嘉太夫 竹本綾之助

竹屋庄兵衛 竹本 素八

町 衆 竹本駒之助

三味線 鶴澤 重輝

ツレ弾 豊澤 仙雛

恋女房染分手綱 太夫 竹本土佐広  
重の井子別れの段 三味線 鶴澤 寛八

### 道中双六

丹波与作待夜小室節(近松門左衛門作、宝永四年八一七〇七)初代竹本義太夫初演)

馬方三吉が、双六を出して姫君の御機嫌をなおす。その道中双六の部分、若手中心に合奏曲風に演奏します。

丹波与作のうち、この部分は、義太夫が後に自分の後継ぎにと遺言することになる政太夫に語らせたといわれています。三百年後の義太夫節の現状とオーバラップするところはないうか。

スライドによる三百年の歴史

昨年の「女流義太夫の今昔」に続き、今回もスライドを使って解説いたします。吉川会長が肩衣をつけて登場する——のびのびになっているこの趣向が実に実現するかどうか、これもお楽しみに。

### スライドによる三百年の歴史

スライドによる三百年の歴史

スライドによる三百年の歴史

### 蜷川——竹本義太夫物語——

水上勉氏の脚本、重造師の作曲、新しい形の語り、いずれも幕をあけてのお楽しみ。

水上義太夫と、教師の講習会で話された吉川義太夫(9、13頁)の相違点は?

### 重の井子別れ

丹波与作待夜小室節の増補改作。改作とはいえ原作と殆んど変っておらず、初代義太夫初演当時の面影をとどめています。人間

国宝、87歳の竹本土佐広に御期待下さい。

砂利が敷きつめてありましたのを掻き寄せま  
して何とか補いをつけました。回向院でも始  
めての事でしたそうですけど、義太夫さんは  
如何お聴き下さいましたやら。

野澤 錦鈴

夜の本牧亭という独特な舞台空間のほの明  
りに包まれて三味線を弾いていると、ふとし  
た瞬間一時代位昔の世界に引戻されているよ  
うに感じることはありません。今回の奉納演奏  
は、そういう意味では本牧亭以上に強烈な体  
験でした。屋外、しかも寺院の墓所での演奏  
は生まれて初めてのことで。どこ迄も続く大空  
ひっそりと静まり返った下町両国の大気。回  
向院の玉砂利。肩衣姿で威儀を正し、筑後掾  
の墓石を見つめているうちに、私は江戸時代  
迄タイムトラベルしていました。筑後掾の魂  
と心の会話を交せた上に、義太夫節三百年の  
歴史の重みを実感することもでき、本当によ  
かったと思います。



問題の(?)後姿 (和田博氏撮影)

祖先祭雑感

中島 古平

世のうつりかわりにいく度か盛衰の影を写  
しながらも三百年の伝統の灯をたやさず、今  
年も祖先祭を無事に催すことの出来たことは  
御同慶に存じます。

特に近松の名作「曾根崎心中」天神森の名  
曲を墓前演奏された企画はこの道に生涯を打  
込まれた諸々霊をお慰めするに何より相応し  
い御供養であったと思います。唯、懇親会の  
席で若い正会員の発言が聞かれなかったこと  
が残念でしたが、夫々の師匠方御列席では無  
理のないことで、出来れば何れかの機会に次  
代を担う方々の斬新な御意見発表の場を作っ  
て頂きたいし、それが今後の義太夫節の向上  
発展につながることを期待いたします。  
(義太夫協会参事)

寺澤 正夫

貞享元年(一六八四)竹本義太夫が大坂道  
頓堀吉左衛門町、もとの井上播磨の芝居跡に  
竹本座の櫓を挙げた。爾来三百年の星霜が流  
れ今日の義太夫界を迎えた。

10月10日、両国回向院初代墓前で「祖先祭」  
を開催、多数の参列者ともども、若手技芸員  
たちにより「曾根崎心中道行」を献奏したこ  
とは、画期的な斬新な記念行事として、一同  
多大の感銘を受けた。とくに、発祥地に近い  
大阪南区に生れ、幼少時から親に伴われ松島  
にあった御霊文楽座や、千日前播磨席で浄瑠  
璃の洗礼をうけた私にとって、生涯忘れ得ぬ  
想い出となった。

近年義太夫教室、教師のための義太夫講習  
などの普及事業により若きファンが増した  
事は朗報だが、反面10月17日、朝日新聞記事  
「資金不足義太夫無音」が現実では前途は多  
難である。記念公演の盛況や、基金募金への  
積極的運動を推進して、21世紀へと邁進する  
ことを切望するものである。

(賛助会員)

祖先祭初参加の喜び

菱沼 繁三

心洗われるような楽しい一日であった。定  
刻開祖墓前には女義若手メンバーが勢揃いし、  
吉川会長には「墓前で心中ものの献奏とは？  
の批判もあろうが、本来心中とは心中立ての  
意で人との契りを守ることであり、又江戸時  
代女性の演奏はなかったが、本日の曾根崎中  
中の女性出演は喜んでいただけるだろう」と  
前置挨拶され、いよいよ墓前に向い演奏がな  
された。(なおこれは演奏者の後姿を見るこ  
とになるので、カメラ写りやPRなど心持ち  
八の字に並ぶほうがよいのではないか)。  
つづいて本堂で本多導師の読経・法話のち  
座敷で昼食、懇親会となり、吉川会長の開祖  
を偲ぶスピーチはいつに変わらぬ律儀で誠実な  
人柄が窺われた。次に猿三郎師から開祖の墓  
の隣の糸塚建立(犬猫供養塔)等紹介され、  
満場の熱気に酔った私は銀座で辻説法ならぬ  
義太夫の街頭演奏の夢を描いていた。

素顔にて三味持ち行けり竹の春 秋水子

(義太夫教室OB・賛助会員)

祖先祭寸感 渡辺 兼佐

義太夫の菩提寺超願寺は天王寺にあるが未だ詣ずるの機を得ない。  
幼少時に多少あった回向院周辺の記憶は喪失したが由緒ある寺院に於ける三百年祭記念法要に参加しての感銘は深い。

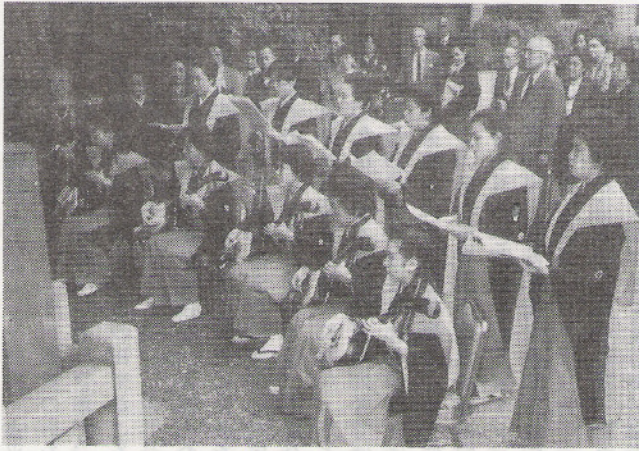
竹本義太夫に関しては会報所載吉川会長の「竹本義太夫の人と芸」上下によって詳らかですが輝しい業績を残し惜しくも他界、爾来三百年数多輩出の名人上手の努力研鑽が結果して義太夫浄瑠璃が吾邦音曲史上に君臨する事久しい。近時文楽人形浄瑠璃をはじめとして古典芸術孤塁の一廓をなす義太夫協会に対しても識者の御努力結集の下に国家助成の手が差し延べられるようになってきたは真に同慶の至りで継承者各人の責務は重大と言へる。正会員各位の芸道練磨探究はもとより協会当事は若き年代層の真諦の理解愛好者の獲得充実により一層御努力願いたい。  
人が人を動かす事言うは易く實際は難事業ですが。  
(義太夫協会参与)

祖先祭に思う 和田 博

この世の名残り 夜も名残り  
——南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏  
義太夫節三百年の今年、竹本義太夫師の墓前に捧げる「曾根崎心中」天神森の段。境内に響き渡る太棹の首色、女流若手総出演による心のこもった演奏をしみじみと聴く。誠に意義深い企画であった。ここ回向院に眠る祖師義太夫はじめ多数の義太夫関係先亡諸霊も

共に聴かれ、さぞ喜ばれたことであろう。  
祖先祭には、ここ四、五年毎歳参加させて戴いている。猿三郎師の会報記事によると、もう随分永い伝統がある由。今後も決して法灯を絶やさないでほしい。祖先祭の期日は、昨年から実施の十月が適切と思う。誰でも皆が忙しいのは同じこと。

三越劇場記念公演の新作「蜷川」竹本義太夫物語と、邦楽界の至宝である吾等の土佐廣師の「恋十」が待たれる。今後の斯道一層の飛躍の為に皆の力を結集し成功させよう。  
59・10・21記(義太夫協会参与)



墓前奉納演奏 59年10月10日(和田博氏撮影)

85都民芸術フェスティバル

第15回 邦楽演奏会

昭和60年3月10日(日)

※於第一生命ホール

※一五〇〇円(東京都助成特別料金)

邦楽連合会主催・東京都後援

屋の部(12時30分開演)

生写朝顔話 浄瑠璃 竹本土佐廣

宿屋の段 三味線 鶴澤 寛八

琴 豊澤 幸治

夜の部(4時30分開演)

お里 竹本駒之助

義経千本桜 維盛 竹本 朝重

餅屋の段 若君 竹本 越孝

御台 竹本綾之助

三味線 鶴澤 重輝

清元・古曲・新内・常磐津・長唄・三曲として義太夫、邦楽界あげての一流演奏陣が出演するこの会も、すっかりお馴染みになりました。

※お申込み、お問合せは事務局まで



# 三百年に思いを馳せて

菅 邦 夫

編集部からの「何か一文を」という有難いお言葉に、素人の門外漢を顧みず、烏滸（おこ）がましきも、いささか重い筆をとりました。

吉川会長が九月二十一日日本牧亭で述べられた「竹本義太夫の人と芸（上）」をまことに興味深く、いろいろと教えられる所多く拝読しました。その中に、初代竹本義太夫が敵島興行の期間、毎夜敵島神社に詣でて、芸における開眼を祈願した有名な條（くだり）が美しい文章で語られています。満願の日に義太夫が悟得したと伝えられる芸道の秘儀こそ、現代に脈々と伝わる義太夫節の歴史における決定的転機というべきでしょう。

どんな芸術でもそうだと思うのですが、その創始や発展は、一、二の天才のみで成し遂げられるものでなく、前期的な萌芽から、初期の発展段階をへてしだいに成熟する中、突如として一大偉人が出現して画期的な進歩をもたらす、しかも重要なことは、それについて優秀な人びとが輩出し、伝承の上に工夫を積み重ねてその芸術を完成させて行く、これが典型的な姿だと思ふのですが、義太夫節の歴史ほど如実にこの過程を示したものはなく、また前期的な浄瑠璃節から今日の義太夫節を導き出した決定的天才は、初代竹本義

太夫において他にないことは万人がひとしく認める所に違いありません。

初代義太夫が敵島神社で悟入した境地こそ、近代義太夫節の真髓といふべきで、その内容は具体的には「鸚鵡ヶ袖」序文と「筑後掾教訓書」に述べられている由です。残念ながら私には原著を繙くだけの能力がありませんので、孫引きのようなことで申し訳ありませんが、要するに義太夫の妙技は、先人井上播磨の豪快と、直接の師であった宇治加賀の優美とを結合し、技術的には「地」と「詞」との流動無碍を実現したものと思われまます。

しかしもっと重要なことは、義太夫の真意が、義太夫節が低俗におもねったり、皮相な流行に迎合したりすることを退けて、人生の真相と庶民の哀歓とを追究し表出することを至高の目的とした敢しさにあったと思われる点です。

義太夫が経営の困難に喘ぎながらも、近松門左衛門という無二の盟友を得て、初心の貫徹に苦闘した不撓の精神はまことに今に至るまで私たちを心から感動させずにおきません。「義太夫節三百年」のこの時期に、血のにじむような初代竹本義太夫その人の生涯と志とに深く想いを潜めたいと思ふのです。

吉川先生は前号冒頭の文章で、現代は平和にめぐまれて義太夫節三百年を意義深く記念できたのにひきくらべ、義太夫節二百年（明治十七年）は文楽、彦六両座の分裂さわぎで始祖にたいする感謝をきざむ余裕もなかったことを述懐していられますが、そのもう一つ前の義太夫節百年はどうだったでしょうか。たまたま木谷蓬吟氏の「文楽今昔譚」に

「（竹本義太夫の）墳墓（生地大阪の……）は、菩提寺に当る天王寺の南、土塔山超願寺に現存している。ただし、墓石は最初の物でなく、文化十年その末葉竹本喜義太夫なる人が、百年忌追福の挙のあった前後に建てたものらしい。（略）その他には、天王寺西門、納骨堂の裏に、寶篋印字の古雅な、筑後掾墓塔がある。これは高弟であり富裕者であった豊竹若太夫が一個建立になる、師恩追慕の記念塔である」とあります。

これで見ると、百年忌には「追福の挙」があったようですが、果たしてどんな内容だったのでしょうか。（義太夫協会参与）

## 三百年記念公演プログラム

常任相談役・高野俊雄氏が精魂傾けて印刷して下さった「三百年記念公演プログラム」御希望の方にお頒けいたします。三百年の歴史・年表、初代義太夫関係の図版等、資料としてもお役に立ちます。是非お備え下さい。

B5判32頁 頒価 五百円  
残部僅少！ お申込みは事務局まで



# 竹本義太夫の人と芸 (下の巻)

— 教師のための義太夫講習会より —

解説 吉川 英史

昨年11月20日、本牧亭で行われた「教師のための義太夫講習会」では、遂に吉川会長の肩衣姿が実現いたしました。前回大変御好評をいただきました八竹本義太夫の人と芸の続きをお届けいたします。

(副題は掲載にあたってつけたものです。 文責・編集部)

**肩衣着用の弁——音楽と服装——**  
 本日は雨が降りますところ、又、大変お寒いところをお出かけ下さいまして本当に有難うございます。

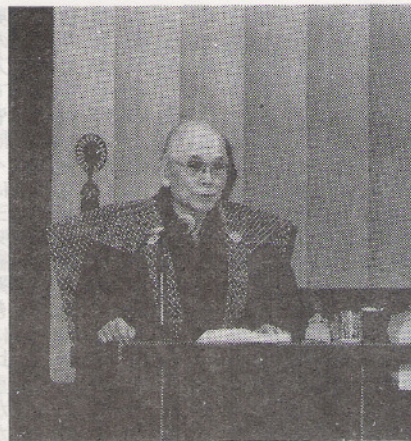
ユー、私が今着ております服は、これを上<sup>しも</sup>下と言わないで、この道では肩衣と申しておりますが、この肩衣を一度は着てみたいと憧れておりましたところ、今夜この席で初めてこれを着けることになりました、何か念願が叶ったような気がしておる訳でございます。

これを着ましたのは、そういう私の憧れもあるのですが、音楽と服装といましようか、音楽と風俗といましようか、そういうことも言ってみたいような気がいたしたからでございます。

今、常磐津とか新内というような浄瑠璃がございいますが、そういうものの親にあたる豊後節というのが昔ございました。この豊後節が上方から江戸に入りまして、江戸中の人

を一ぺんにさらいましたが、その結果、豊後節の太夫が結っておる髪形、豊後節の人達が着ておりますゾロンと長い羽織の形、そのヒモのつけ方、随分下の方に長いヒモをダラリとつける——こういうのが非常に流行りました。そういう芸人の風俗を江戸の人がみんな真似たので、奉行所の禁止令が銭湯などに張り紙されたというようにことさえございました。しかし、何も日本のことだけに限りませんで、戦後、世界的に若者の服装が変りましたが、その変った原因の中に例のビートルズの服装、髪形、そういうことがあった訳であります。やはり、音楽に憧れるということとは、その音楽家の服装まで慕わしいといましようか、憧れることになるのでございましょう。「坊主憎けりや袈裟まで」という言葉がありますが、そのひっくり返して、服装とそういう本質とは仲々離れにくいものがございます。この肩衣で象徴されるところの

義太夫節、自分もあの格好の良い肩衣を着てみたいなあ、と皆が思うほど義太夫が流行って欲しい、私はそう思う訳であります。私が若い頃には、宝塚の少女歌劇の紫の袴に、当時の女学生は大変憧れたものであります。そういう芸と服装との関係を、いま私は、しきりに思い出している訳で、これが私が肩衣を着たことの一つの理由なのでございます。



肩衣姿の吉川会長

## 第一次浄瑠璃革命

さて、去る九月のこの会で、竹本義太夫が天王寺のお百姓の子として生れたことから、師匠筋にあたる宇治嘉太夫との浄瑠璃合戦のことまでお話いたしました。今夜はその続きをお話したいと思っておる訳でございます。

近松門左衛門の作を、初代竹本義太夫が作曲して初演いたしました八出世景清という有名な浄瑠璃がございいますが、これこそ私が浄瑠璃革命と名づけたもので大変画期的なも

のでありました。それ迄の浄瑠璃が、鬼退治とか化物退治とか、スーパーマンの活躍とか、荒唐無稽な内容、筋の面白さだけを狙うという、言わば大人の紙芝居みたいなものでありましたのに比べますと、この八出世景清は登場人物の心理描写・性格描写までしておりまして、まず本格的な戯曲がこれから始まったと言っている程の画期的な作品でございます。今迄の浄瑠璃ですと、どんどん場面が変わる、例えば能楽などではよくあることで「急ぎ候ほどに、これは〇〇に着いて候」という風にですね、ほんのわずかの間に大変な距離を移動してしまふ。山の場面かと思ふと部屋の中であつたり、家の中かと思ふと海岸であつたりする——これは、舞台芸術というより一つの読みもの、物語を、仮に舞台上で見せる、舞台上で聞かせるという形になつたということでありませぬ。浄瑠璃も、始めは読みもの的な単なる物語的なものが三味線の伴奏などで語られた訳であります、この近松の作品に於て、全く舞台芸術に昇華したといひます。か、舞台芸術に成り上つた訳でございます。劇作では、本当はどんどん変つてゐることを何かやりくりしまして一つの場面にしてしまふ、一つの場面で長く事柄を追うということにする訳で、これが一つの劇というものになる前提なのでございます。

この画期的な浄瑠璃八出世景清から後のものを当時「当流」といひました。現代流、現代風ということでございます。それに対して、これ以前のは古浄瑠璃といひまして一応区別しておりますが、私は、本当に一つの革命、第一次の浄瑠璃革命と名づけていいものだと思つております。

作曲家・竹本義太夫

この変革について、従来、近松がこれを行つたという風に言われますが、しかし考えてみると、近松がどんな改革をいたしてもその改革した戯曲を芝居で再現する人がなければ、又それが成功しなければ近松の作品が成功したとは言えない訳です。近松の新しい芸術意図をよくわきまえて、そのことを音楽面、演奏面で活かした、それが竹本義太夫であり、竹本義太夫の功績だということになる訳でございます。

浄瑠璃の作曲というものは、今では大体、三味線の方がなされる。今、竹本義太夫が作曲家だといふとおかしく考える人があるかもしれませぬが、これについては一つの証拠がございます。竹本義太夫が語りました「神武天皇」といふ浄瑠璃がありますが、その本の表紙に「天王寺清水理太夫（竹本義太夫の前名）ちぎのふし付」つまり、本人直接の節付けといふことが書かれてゐる訳です。唄や浄瑠璃に作曲することを節付け、三味線などの作曲のことは手付けと言ふのです。清水理太夫と竹本義太夫の節付けのことは麗々しく書かれておりますけれども、三味線の人は名前もあがつていないし、手付けのことは何も書いてない。ということ、当時、節は大体太夫が付けたということ、三味線の手の方はそれ



竹本 筑後 掾

程重要でなかつた——これは浪曲・浪花節を考えるとよく解ると思ひます。虎造節とか奈良丸節などというのが有名でございますが、このように語る人の名前は残つておりますけれども、その時の三味線弾きの名前などというのは残つておりませぬ。三味線は、奈良丸・虎造の語る浪花節にあしらうという程度のものであつた訳ですね、その程度のもものは余り注目されない、余り歴史に残らない訳であります。それが時代が変わると、浄瑠璃の方でも唄の方でも段々に三味線弾きに比重がかかり三味線弾きが大体作曲家ということになつて参りますが、少くとも義太夫の時代に於ては義太夫その人が作曲をした、三味線は竹沢権右衛門という相三味線が作曲したのであります。それが、それは太夫の節にあしらう程度のものであつたと見てよろしいと思ひます。

受領・竹本筑後掾となる

さて、竹本義太夫は元祿十四年、受領いたしました。竹本筑後掾藤原博教となります。これは、官名、官途といひまして一応、天皇の名において下した名前でございます。筑後掾と申ししても、別に筑後に行く訳ではないし、筑後で獲れたお米を貰う訳でもございません。名譽ある称号ということで、今日でいへば、まず芸術院会員の称号を貰ったようなものであると思います。

この受領の祝賀と致しまして近松は「蟬丸」といふ浄瑠璃を作りました。蟬丸とは、平安初期、醍醐天皇の四番目の皇子として生れた方でございますが、盲人であられました。生れつきの盲人であるというのが大体通説でありましたが、近松は考えを巡らせまして、大変近松らしい創作をいたしました。つまり、蟬丸は大変な美男子で、宮廷の多くの女性から愛された、そういう恋愛沙汰で多くの女性の恨みを受け、その恨みの祟りで目が不自由になったというのでございます。さすがに近松で、やはり天然痘で等というよりも、恋の恨みで目が見えなくなつたという方が、はるかに芸術的であるように思います。

蟬丸という人は、琵琶の名人であつて、逢坂山で一人琵琶を弾いておられる、後世、特に琵琶の関係者には音楽の神様として尊崇される方でございます。そういうことなので、近松は蟬丸を題材にした台本を作りまして義太夫の掾号受領の祝賀記念に捧げたのでございます。蟬丸が非常に艱難辛苦をしたことと

竹本義太夫が芸道上、艱難辛苦をしたということと通わせて近松は「蟬丸」を作つたかもしれません。

義太夫こと筑後掾も、この「蟬丸」を語つて非常に感動させたいのです。ですから、当時大坂では「蟬丸」が大変に流行つたのでございます。特に流行つた言葉は「寝初めし夜半の夢消えて、縁さへうすきから衣御痛はしや蟬丸は、何のむくひか浮世の闇、……御身に添ふるものとは玄上の琵琶一面」——この玄上とか青山とかいふのは琵琶の名器として昔から有名なであります。今読み上げました「御痛はしや蟬丸は」といふ所は、特に義太夫が心をこめて語つたらしい。その節に胸を打つものがあつたのでしよう、大坂中の町人達が「御痛はしや」「御痛はしや」と唸つて歩いた、そこで川柳にも「暗がりに御痛はしやが行きあたり」と詠まれたのでございます。大変誇張してはおりますが、それ程「蟬丸」が当時好評を得たということになる訳であります。

受領記念「蟬丸」演奏の時の一つの逸話がございまして、これが又、義太夫こと筑後掾の手柄を表わしているように思えます。明治に竹本撰津大掾という名人が受領いたしました。装束の御下賜があつた時に、確か、それを着けて語られたように思います。それをとやかく言う訳ではありませんが、この竹本筑後掾は装束を頂いたけれども大変畏れ多いといふことで、それを身に着けず、舞台の上手にお三方を置き、その上に装束をのせて、自分

は下手の方で見台を前にして語つた、そういう大変謙虚な方であつたということが、この一事をもつても判るのではないのでしょうか。

第二次浄瑠璃革命

元祿十六年五月七日「曾根崎心中」が初演されました。それ迄は、浄瑠璃でも物語でも過去のことばかりを扱つてゐる（これは中国でもヨーロッパでも同じであります）ところが、この「曾根崎心中」は、その時代のことを扱つてゐる。聞きに来るお客様が経験するようなこと、そして大坂という土地に起つたこと、それを芝居に仕組んで見せ聞かせた。これは今では何でもないことでありますが、当時としては画期的なことでありましたので、私は第二次浄瑠璃革命といつていいのではないかと思つておる訳でございます。

八會根崎心中

元祿十六年四月二十三日、大坂北の新地、天満屋のお初という遊女、それと内本町の醬油問屋平野屋の手代の徳兵衛という若者、この二人が曾根崎の天神様の境内で情死した。刃物で自害をしたり刺し殺したりして二人は死んでゐる訳です。この事件がバツと拡がつたのを近松が聞き、早速劇に仕組んだ訳であります。たつた二週間ほどの内に芝居の台本が出来、作曲が出来、舞台にかけられた。私共、今日の常識では考えられないスピード操作といひますか、驚ろくばかりでございます。

義理と人情と金

義理と人情とお金、この劇を作る三要素をとり入れた浄瑠璃は八曾根崎心中Vあたりが最初ではないでしょうか。特に、大坂という商人の町での金というものと人生との係り合いは、江戸とは大変違う重味を持つておる訳で、江戸では金ということがそれ程、表面には出て来ないようであります。

徳兵衛とお初との深い馴染み、これは人情というものであります。伯父であり主人である忠右衛門に、徳兵衛は義理というものを感じなければならぬ。特に、忠右衛門は、見込んだ徳兵衛に自分の姪を押しつけようとして、そのためには、徳兵衛の継母にイヤといわせないようにお金をどんどん渡します。

徳兵衛としては死にも狂いでお金を集め、これを返せば自由になれる、いやな縁談は断ることができると思った矢先に、友人から金を貸してくれと泣きつかれ、いやいやながら融通する。ところが、その友人は「こんな金は借りた覚えがない」という。証文があると云えば「それはニセ証文で、お前の偽造だ」と、皆の前でまるで犯人扱い、徳兵衛は非常に恥をかき、沢山の人達に寄つてたかつて撲られます。金が返せないから主人の言う通りにならなければならぬ、さもなければ江戸の方にやられるということで悩んでおる。それに同情したお初は「二人でもう極楽に行きましよう」と心中になるのであります。そういう所に義理と人情とお金というものが出てきている訳でございます。

この後には

「忠臣蔵」など当る。浄瑠璃が沢山できてますけれども、この八曾根崎心中Vは画期的な大当りをとった。それによりまして、筑後掾は今迄の赤字を解消、借金を返すことができたのであります。この時の義太夫は筑後掾の気持を察しますと、日本シリーズで優勝した古葉監督よりもっとうれしかったのでないでしょうか。本牧亭でも義太夫協会は赤字でありますし、国立劇場の文楽でも満員、赤字なんです。結局、採算がとれないというのが興行界の悩みであります。この八曾根崎心中Vの画期的な大当りで、やっと赤字を解消するのであります。

筑後掾、引退を決意

喜んだはずの筑後掾であります。それから一年程して病氣引退ということを出す、実際に病氣ではなくて、何か言い訳のようなものであるようです。筑後掾は、道喜という名前にしまして、手には数珠をいつも持ちましてお寺詣りをする、信仰三昧にふける、もう竹本座には足を向けない、浄瑠璃なんぞ語りたくもないし聞きたくもないというようなことを言う訳です。まるで登校拒否をする小学生か中学生のように頑固に竹本座のことを拒否する——何故こうなったのか、これは昔から疑問でありまして、その謎を完全に解いた人はないと思えます。

私もこの理由がよく解りませんが、竹本義太夫生涯の謎の一つであるこの事件、ひとつ皆さんと一諸に考えてみたいと思えます。

①義太夫は大音、大きな声であった。豪快な語り方で、勇しい物語を得意としておった。

つまり時代ものの義太夫、時代ものの筑後掾であった訳ですね。それなのに八曾根崎心中Vというような、いわばナヨナヨヘナヘナした世話ものがこんなに当る。ということは、自分の時代は終わったと悲観して、浄瑠璃界から足を洗うことにした、かもしれない。

②長い間、赤字に悩み、劇場経営がつくづくイヤになっていた。しかし、借金したままでやめては迷惑をかける。幸いに大当りをもって借金もなくなった、ところが自分の退きどころであると考えた、かもしれない。

③義太夫が嘉太夫のもとから別れる時に、一諸にやっぺいこう、金はワシが出してやると約束した興行主・竹屋庄兵衛がいつの間にか手を引いた。人間というものには信用できない、頼み甲斐がないと思っている所へ、将来を見込んで頼りにしておりました竹本采女という弟子、これが八曾根崎心中Vの興行のわずか二ヶ月位あとで、独立して豊竹座というものを作り、豊竹若太夫と名乗るのであります。

これが義太夫こと筑後掾のいわばライバル、敵役となり、これから竹本座と豊竹座がシノギを削って浄瑠璃界であい戦うことになりました。両座がシノギを削ることによって浄瑠璃界は発展したと、一応歴史上は喜んでおる訳ですけれども、当人たちにしてみれば大変苦しく、信頼を裏切られることの寂しさというものに人生のはかなさを感じて遁世を思い立った、かもしれない。

しかし、一つ一つでなく、そういうものが色々あって引退と言いつつ出した、それが一番確かかもしれないと思いますが、皆さまはどうお考えになりますでしょうか。これは、どこにも解決した文献はございません。

太夫に専心

この引退に一番驚き、一番困ったのは弟子たちでございます。皆で懇願いたしました、結局、解決策として、座本、経営の方は誰か他の人がやる、義太夫は太夫という芸一筋になるということで一応まとまりました。竹本義太夫という人は、前から言っておりますように非常に誠実な人でございますので、自分本位にやめたいと言ったのは悪かった、弟子のことを考え、義太夫節将来のことを考えるとここで止めるべきではないと気をとり直して浄瑠璃を続けた訳でございます。

門人たちはホッといたしますが、その結果竹本座の新しい座本に竹田出雲という人が決ります。竹本座の組織改革の記念第一作として八用明天皇職人鑑という近松の作が出される訳ですが、その三段目で初めて出語り、出遣いということをやった。今までは、幕や御簾の内側で隠れて演奏、人形も幕の上にあけて、遣う人は見えなかった。それを、幕や御簾の外に出て、演奏者も人形遣いも見せるということになりました。これは人形浄瑠璃の演出上の革命でございます。

この曲の中には官名についての一部分がありまして「さて職人には官位を与へ、諸国の

受領に任ずべし、御身よろしく計らひ給へ：今も国名を許されて、特に近江や世に出雲その萬代の竹の名の筑後の後の末長き、御世にすむこそ豊かなれ」ここに近江とか出雲とか筑後とかいうのは国の名前であり豫号でありまして、竹田出雲、竹田近江などという経管陣も近松は詠みこんで、一つの祝意としておる訳でございます。

こういう風に当時のことを詠みこむというこの精神、それを私は、今の邦楽界にもう一度考えに入れて頂きたいと思うのです。邦楽は古典の利子だけで喰っていくべきではなくて、同時に現代の邦楽として生きるべく、いつも新しいものにも目を向けなくてはならないと思う訳であります。

そういう訳で、義太夫協会は、FM東京とタイアップいたしました八蜷川—竹本義太夫物語—というものを新作して、十一月二十七日、日本橋三越劇場で演ずる訳でございます。これは完全な義太夫協会のコマ—シャルでございますが、しかも、ビップエレキバンに負けないように会長自らが身をもって宣伝しておる訳でございます。

晩年

その後、十年間位の間に義太夫は沢山の名曲を手がけました。中に八傾城反魂香—吃又—とか八碁盤太平記—これは赤穂浪士を題材としたもの、八堀川波の鼓—という姦通もの、八丹波与作待夜小室節—八心中重井筒—八冥途の飛脚—八夕霧阿波の鳴渡—……大変沢山

の曲がある訳であります。そして正徳四年八月に、竹本座で滝口入道と横笛を扱いました八娥歌加留多—という浄瑠璃をやっている時に筑後掾は病気になりました、九月十日、ついに亡くなりました。(享年六十四歳)

野辺の送りには、五十四人の門弟達が白無垢に足袋はだしで柩のお供をいたしました、そのお墓は、菩提寺でありました天王寺南の超願寺というお寺に今もあるのでございます。墓石は最初のものではなくて、文化十年、百年忌の時に作り直した新しいものだそうでございます。ほかに、豊竹若太夫が作りました筑後掾の記念塔のようなものが、天王寺の西門にあるそうでございます。この豊竹若太夫という筑後掾と袂を分って豊竹座を作った人この人との関係も私にとっては謎でございます。若太夫は恩師に対して敵対したのか、或いは義太夫がそれを了解して独立させたのか、不義理をした門人なのか、本当はそうでなかったのか—これも永遠の謎でございます。これで二回にわたる「竹本義太夫の人と芸」を終りたいと思います。どうも長時間、有難うございました。



筑後掾(晩年)

◆◆◆◆◆第14回 心身障害児のための特別公演◆◆◆◆◆

◆◆◆◆◆収支決算報告◆◆◆◆◆

<収入の部>

会場募金箱 (20・21日)	52,355円
当日入場料	23,200円
出演者扱切符代	31,900円
義太夫協会補助	46,745円
協会扱御寄附	187,500円
<b>&lt;内 訳&gt;</b>	
新小松御一同様	51,000円
坂本 朝一様	13,000円
妣田 圭子様	13,000円
松尾 武市様	13,000円
河野 國声様	10,000円
新橋組合様	10,000円
菅 邦夫様	10,000円
中村 初波奈様	10,000円
松岡 語松様	10,000円
宮脇 雪むら様	10,000円
横山 敏雄様	10,000円
内野 アキコ様	6,500円
鈴木 一光様	5,000円
竹本 扇太夫様	5,000円
豊竹 勝司様	5,000円
鶴澤 重造様	3,000円
塚原 心丸様	2,000円
豊澤 新兆様	1,000円
<b>収入合計</b>	<b>341,700円</b>

<支出の部>

心身障害児のための寄附金	100,000円
本牧亭席料他諸掛	76,000円
交通費	79,380円
通信費	52,320円
床世話・荷上他	20,500円
総稽古諸経費	5,500円
祝儀他	4,000円
諸雑費	4,000円
<b>支出合計</b>	<b>341,700円</b>

恒例となりました年末「忠臣蔵」チャリティ公演、第14回は、NHK厚生文化事業団を通じ、十万円を心身障害児福祉に役立てて頂くことになりました。今回の公演には、東京在住の会員をはじめ、大阪から源平・重輝

そして本牧亭初出演の広之助、翌日のお名残り公演には厚木市で活躍している土佐子といった方々の協力がありました。  
また今回もプログラム、切符等の印刷一切は、協会常任相談役の高野俊雄氏がおひきうけ下さいました。募金箱には、一万円、五千円といった紙幣も——皆様の有形・無形の御協力によって無事に義太夫節の三百年を納めることが出来ました。どうも有難うございました。(12月28日現在)



おすすめします 邦楽百科辞典

このたび音楽の友社より、吉川英史先生監修の「邦楽百科辞典」が刊行されました。

「本書は、単独に日本伝統音楽全般を扱った最初にして唯一の辞典である。種目・人名・楽器・曲名・書名はもちろん、とくに重要でありながらわかりにくかった用語が今回画期的に大量に採用され、懇切な記述がなされている点で、他に類書がない。邦楽の愛好者ばかりでなく、研究者にとってもありがたい福音の書である」(監修のことば)  
今までにこの種の辞典がなかったことが不思議なくらい、是非備えたい一冊です。

B5判 1024頁 定価15,000円  
一 月 末 日 迄 刊 行 記 念 特 価 13,500円  
音 楽 の 友 社 ○ 三 ( 一 三 五 ) 二 一 一

△お見舞▽

竹本(歌舞伎義太夫)の三味線奏者、鶴澤英治師は、去る12月16日、国立大劇場出演中に脳血栓で倒れ、飯田橋警察病院に入院中。一時は重態でしたが危機を脱し、今は小康を保っております。

前号の「富士の裾野でねえんね 吉金の駒のこと」が大変好評で、次は三味線のことを書いて頂くことになっておりました。一日も早い御回復をお祈りいたします。



義太夫節三百年  
基金募金中間報告

昨年九月来、会員各位ならびに関係者各位  
にお願いしておりました「三百年基金」は、  
皆様の暖い御支援により、59年12月28日現在  
二、六三九、〇〇〇円となりました。

俳優協会会長・中村歌右衛門丈そして、尾  
上梅幸丈、尾上松緑丈、中村勘三郎丈、片岡  
仁左衛門丈の皆様をはじめ、歌舞伎関係の方  
々からも御支援をいただいております。

誠に勝手ながら、昭和59年度いっぱい(本  
年3月末日)まで受けつけさせて頂きたく、  
何卒お力添え賜りますようお願い申し上げ、  
中間報告とさせていただきます。

新春懇親会御案内

\* 1月29日(火) 6時30分

\* 蓬萊閣 三階和室 上野2-14-29

電(八三一)一七六三 上野駅5分

\* 会費 五、〇〇〇円

何か一品、景品をお持ち下さい。

何が当るかお楽しみ!

今年初の顔合せ、昨年御好評をいただきま  
した蓬萊閣で、北京料理の卓を囲んで楽しい  
御歓談を—会員以外の方もどうぞ。

\* お申込みは1月24日(木)までに事務局へ

女流義太夫いよいよ

いよいよ発売!

義太夫節三百年記念盤「女流義太夫・いま  
がいよいよ」この21日、ティック株式会社より  
発売のはこびとなりました。5頁に寄稿して  
下さった中井智恵子氏制作担当になる待望の  
豪華四枚組です。

吉川英史・中村とうよう・三國一朗各氏の  
ことば、景山正隆氏の女流義太夫の歴史、竹  
本綾太夫事務局長の女流の現状、演奏曲目の  
解説・詞章、演奏者略歴、略年表等、盛り沢  
山の美麗解説書(A4版)つき。従来の方  
の方はもちろん、義太夫節の魅力に触れる  
機会の少ない若い方にとって「女流義太夫再  
発見」のきっかけとなれば幸いです。

LP四枚組 一〇、〇〇〇円

- (第12面) 酒屋 土佐広・寛八・錦輝
- (第3面) 湊町 染登・友路
- (第4面) 巡礼歌 綾之助・綾一・重輝
- (第5.6面) 寺子屋 土佐広・春華・素八  
駒龍・土佐恵・寛八
- (第7面) 野崎村(前) 朝重・重輝
- (第8面) 野崎村(奥) 駒之助・重輝・錦輝

\* 義太夫協会でもお取次いたしますのでどう  
ぞお申込み下さい。地方発送の場合も御相  
談に応じます。

「邦楽百選」公開録画

△2月1日放映予定▽

—お誘い合せ御参加下さい—

昨年の「女流義太夫の今昔」に続いて  
今年もNHK・教育テレビ「邦楽百選」  
の公開録画が行われます。

人間国宝・竹本土佐広をはじめ、女流  
が総出演、ゲストには文楽人形を屋外に  
連れ出し「曾根崎心中」を作った女性映画  
監督・栗崎碧氏が登場します。義太夫節  
三百年の歴史の中の女流義太夫の位置づ  
けが浮き彫りになることでしょう。司会  
はお馴染、山川静夫アナウンサーです。

収録後、山川氏の邦楽よもやま話のお  
年玉(お得意の声色なども?)がござい  
ます。お寒い折ですが、どうぞお誘い合  
せお出かけ下さいますよう御案内いたし  
ます。

\* 昭和59年1月21日(月)

\* 午後7時より本番開始

6時30分までに御入場下さい。

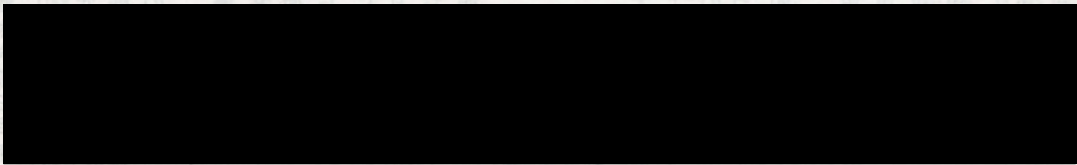
\* 上野広小路本牧亭(八三一)六一三七

\* 入場無料

お申込み・お問合せは事務局まで



\*\*\*\*\* 新入会員御紹介 \*\*\*\*\*



\*\*\*\*\* 住所変更 \*\*\*\*\*



歌舞伎の義太夫 竹本連中の  
後継者養成事業

竹本講習について (十一)

先十二月十九日、第七期竹本講習生と第二期鳴物研修生の発表会が、国立演芸場で行われました。第七期講習生は、三味線の井田浩樹君(東京都出身・20歳)一人であり、一人は病気の為、一人は中間試験で落ち、結局井田君一人になりましたが、一年有余の間、一生懸命頑張った、この日を迎えたのです。

当日は「桂川の道行」(竹本越道指導)と「朝顔宿屋」の琴(川瀬白秋指導)を演奏しましたが、なかなか好評のようでした。近年には、鶴澤絃二郎さんが亡くなられ、また引退中とはいえ、鶴澤扇糸師も今は亡く、その上、十二月十六日は鶴澤英治さんが、国立大劇場に出演中に脳血栓で倒れられた折り、一人でも若手が加わるのは頼もしいことです。尚、研修生修了発表会は、第二期鳴物研修生・第八期歌舞伎俳優研修生と共に、三月十五日頃に国立小劇場で行われる予定です。その時には芸名も決まる筈ですが、一日も早く戦力になることを期待しましょう。

計報

■小柳団鳳氏(賛助会員) 59年10月25日逝去  
御冥福を心からお祈り申し上げます。

△寄贈▽

佐々木明郎氏 ビール(祖先祭)  
鶴澤駒登久氏 菓子(祖先祭)  
今川 清美氏 菓子(祖先祭)  
和田 博氏 菓子(祖先祭)

室屋 政弥氏 祖先祭スナップ写真  
竹本 素丸氏 電卓・タイマー・文具多数  
豊澤多美子氏 文具多数

鶴澤 重輝氏 アガリ糸 多数

河野 國声氏 テープ多数(教室OB会)

宮脇雪むら氏 舞台用見台 一台

豊澤 仙廣氏 根緒・胴掛のヒモその他

藤倉 明治氏 朝重リサイクル舞台写真

豊澤 瑩緑氏 アガリ糸 多数

鶴澤宏太郎氏 アガリ糸 多数

高野 俊雄氏 重之助師追善会スナップ写真  
義太夫協会会報 合本

義太夫節三百年記念公演  
チラシ・プログラム印刷一式

師走合同公演チラシ・プログラム  
切符等 印刷一式

編集後記

でゆっくりとお読みいただきたいと思っておりましたのに、お正月の炬燵で校正という仕儀に相成りました。33号は、これまでの最多頁数、執筆陣もかつて無い沢山の多彩な方々に御協力いただきました。三百年、三百年で暮れた昨年、本年は新たな気持で頑張りたいと思います。どうかよろしくお願ひ致します。